

大阪商業大学学術情報リポジトリ

弥次郎兵衛・喜多八はどんな大阪を観たか

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田, 忠, ODA, Tadashi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/331

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



〔史料紹介〕

弥次郎兵衛・喜多八はどんな大阪を観たか

小 田 忠

1. 「浪華名所獨案内」のこもごも
2. 「浪華名所獨案内」
3. 来阪者の見物跡追
4. 『東海道中膝栗毛』に観られる大阪

今回の史料紹介は「浪華名所獨案内¹⁾」である。本学商業史博物館に架蔵されている史料で暁鐘成の手によって作成された。類版もあるが内容はほとんどおなじである。大阪本屋仲間を経由せずに作成されているから、本屋の依頼により作られたと類推する。「浪華名所獨案内」に記入されている200を超える場所を眺めても仕方なく、さりとて製作者の意図を読み取る訳でもなく、『東海道中膝栗毛』の作者十返舎一九ならどのような大阪見物を展開したのか。あるいは伊勢参宮・熊野三社・西国三十三ヶ所・金毘羅参詣の途中に大阪に立ち寄って見物をした人々の思いとは……………、一枚の色刷りを基に思いをめぐらす。

1. 「浪華名所獨案内」のこもごも

『東海道中膝栗毛』の作者十返舎一九は享和2年に初編を出版してから、文政5年まで実に21年の長い年月に渡って書き継いでいる。東海道の道中・宿場でのエピソードを弥次郎兵衛・喜多八の2人が繰り広げる構想になっているが初編から八編までの全体量に比較して大坂見物に随分多くの分量を割いている。

若い頃は江戸に在住していた、その後、大阪に移住した。寛政6年に再び江戸に戻るまで、7年間大阪に住んでいた。

〈寛政元年には、若竹笛躬・並木千柳とともに、近松余七の名で「木下蔭狭間合戦」という浄瑠璃を合作した²⁾。〉とあるから、寛政元年～文化13年の期間に第八編を書いている。それは寛政年間に大阪で生活をした地の利から『東海道中膝栗毛』第八編の源泉があった。

作者十返舎一九がさまざまな大阪を知っていたことを『道中膝栗毛七編』述意に言い訳がましく述べている。——しかし、京都については名所・旧跡を見聞するには時間もなく、

1) 暁鐘成「浪華名所獨案内」大阪商業大学商業史博物館。

2) 十返舎一九『東海道中膝栗毛』（麻生磯次校注、岩波書店、昭和33年5月。）

たまに京都に行っても用事でいくのみで地理もおぼつかなく、年数も経過しており現在の流行から遅れていることもあって、自信がもてない心情を告白している³⁾。

洛陽の名所旧跡しるすにいとまあらず、予若年の比浪花にありし時、おり上京して週遊せしが、そは十とせあまり以前のことなるゆへ、悉く忘失し、今此編にはやうやくその十がひとつをあらはすのみ

嚮にいへる如く、僕浪花に七とせあまりも居住せしが、花洛へは唯用弁の為のみに登れば、一覽の目をよろこばせしまでにて、悉しからず、地理順逆もおぼつかなし。亦今の流行に照らしおはさば、まはり遠く、ものゝおくれたることも多かるべし

手元に一枚もの彩色刷りの「浪華名所獨案内」がある。破損・虫食いを認めるが保存状態は良い。

大阪の神社・仏閣・遊里・地理・橋・河川・通・筋・有名商店等を惜しみなく書き込んでいる。

「浪華名所獨案内」の作者は絵の右下に〈攝陽暁鐘成圖〉と見えるから、有名な暁鐘成の手によってできている。しかし、この種のものとして刊年が記されていないのは普通で、発行年が不詳である。理由は、なくなれば何回でも刷って配布したから刊年を記入する必要がない。

それにこの絵の左下に細長い黒枠に囲まれて上部に〈書肆〉とあるは、下の余白に本屋の住所と名前を押印する。

暁鐘成の「浪華名所獨案内」は沢山配布したが押印されず、今だに未使用として残存したものもある。しかし、この時代にあって売れば人真似でも良く、相手が重宝がってもらえば良いのであって、塵劫記と同じ運命を辿り、類版が刊行されることになる。

この類似書は〈攝陽友鳴杏旭圖⁴⁾〉で、この一枚刷りは〈攝陽暁鐘成圖〉と比較して絵の構図はほとんど一緒で、一部分、船・山が描かれていなかったり、漢字を平かなに書き改めている。地名も少し丁寧に書かれた程度の差異は認めはするが、タイトルも同じ、極似＝真似をしたとしかいいようがない。

また、絵の左下の黒枠に囲まれた名前は〈書肆 大阪平野町通淀屋橋石川屋和助〉となっている。道路に赤色・茶色・藍色と色分けされ、説明書は

赤ノ色ニテ圖中筋ヲ引タルハ一扁通ノ見物巡路ナリ藍ノ色茶ノ色ニ筋引タル処コレ皆同ジ一扁通ノ巡路ト看ルベシ

上記解説文中には明らかに後筆だとわかる言葉があり○印を付した〈看ルベシ〉で鐘成の一枚刷りに説明がなく、朱・藍・茶色の意味を友鳴杏旭圖は先行図の謎解きを果たしている。

そして一番大きな点は暁鐘成の作品リストにも、大阪書籍商の旧記録（『出勤帳⁵⁾』『開

3) 注2)に同じ。

4) 原田伴彦・矢守一彦『浪華大坂』、講談社、昭和52年8月。

板御願書扣⁶⁾』『新板願出印形帳⁷⁾』を調べたが見当たらない。

「浪華名所獨案内」は私家版ないしは、ある本屋の依頼により作られたと思われる節もあり、それ故、後発者は内容に少し手を加えれば訴訟に及ぶこともなく世に出たのは塵劫記と出自を同じくする。刊年を記入していないのも後発者にとって有利に働いている。(後になればどちらが先か確証を求めるのが困難になる。)

石割松太郎の考証によると暁鐘成は寛政5年に生まれ、萬延元年12月19日、68才で没した。

生前、鐘成は多くの作品を残したが嘉永6年の春に門人阿部貞昌に〈暁鐘成〉を譲った。二世鐘成が萬延元年3月11日に44才で、先代に先立ち没してしまった為に〈鐘成著〉のうち、一世二世が混淆して識別はすこぶる困難である。

彼の著作中⁸⁾、注目するのは〈大阪〉に関係した著作、並びに〈地誌〉に関係した著作である。〈大阪〉に関係した著作を紹介すると

兼葭堂雜録(安政6年)、攝津大坂天保山名所圖會、浪華の賑ひ(安政2年)、二千年袖鑑(天保15年～嘉永2年)、攝津名所圖會大成

また、〈地誌〉に関係した著作も豊富にある。

淡路名所圖會、阿波名所圖會(文化8年の序)、宇治川兩岸一覽(文久3年)金毘羅参詣名所圖會、西園三十三所名所圖會、花洛名勝圖會(元治元年)、淀川兩岸一覽(文久元年)

これだけの著作を刊行した実績から〈地誌〉と〈大阪〉に関係する知識は揺らぎがなく、信頼の度は増すばかりで、「浪華名所獨案内」は問題なく刊行できる。

大阪人の洒落か書画人の趣味であるか理解しがたく、一面を披瀝すると、難波村瑞龍寺の門前に豆茶屋と呼ばれる茶店は、暁鐘成の女房おりうが開き、難波の豆茶屋と評判であった。その場所を訪ねると「浪華名所獨案内」難波村に〈瑞龍寺〉あり、その右斜に〈ウレヤス店〉〈豆茶ヤ〉と併記されている。

このような事例は「浪華名所獨案内」にとどまらず、安藤広重『東海道五十三次⁹⁾』人物東海道一保土ヶ谷に「歌重」「村市」とさりげなく暖簾に染めて広告価値を高めている。

同じく、保永堂版一御油に「絵師の一立斎」(広重)・「摺師平兵衛」・「彫工治郎兵衛」が壁に下げられた名札に書かれている。

5) 大阪府立中之島図書館編『大阪本屋仲間記録』『出勤帳』第1巻～第7巻、昭和50年3月～昭和60年3月。

6) 大阪府立中之島図書館編『大阪本屋仲間記録』『開板御願書扣』第16巻・17巻、平成3年3月～平成4年3月。

7) 大阪府立中之島図書館編『大阪本屋仲間記録』『新板願出印形帳』第14巻・15巻、平成元年3月～平成2年3月。

8) 船越政一郎編『攝津名所圖會大成』第七、浪速叢書刊行會、昭和2年2月。

9) 白石克編『広重東海道五十三次』、小学館、1989年1月。

山東京伝も黄表紙『箕間尺三人生酔¹⁰⁾』のなかに〈新形紙煙草入れ〉の広告を出している。江戸の戯作者の式亭三馬、柳亭種彦、曲亭馬琴、鳥亭焉馬達も同じ考えになっていた。

女房の評判になっている茶店〈豆茶や〉を蔭ながら応援する心意気は広告とまでいなくても、有名店として書くところは奥ゆかしい。

さて「浪華名所獨案内」は文字どおり始めて来阪した人にもこの地図があれば希望する場所に行くことができる。大阪に丁稚奉公にきて、たまの休みに日頃噂話に登場する場所に出かける〈案内書〉として活用できるし、当時、神社・仏閣を訪問する気持ちがあれば目的地に辿ることができる。

来阪した遊人、参詣者は目的を果たした後、あるいは途中であっても、大阪を観光し、親しい友人・知人・家族に土産を買うのを常とする。その為、宿泊した宿では大阪を観光案内する人がいた。勿論、団体の場合には1人あたり何十文を支払い、一人であれば何百文を支払うと案内してくれる。

しかし、「浪華名所獨案内」は誰の世話になることなく、1人で遊べる案内書である。

2. 「浪華名所獨案内」

「浪華名所獨案内」は大阪の町が一目でわかる。河川は藍色に、主要な橋名・街道筋名（道路は朱と藍に区分）通名・町名・神社・仏閣・遊里・豪商・有名大店・呉服店・食べ処・芝居・市場・島・茶屋等200を超える場所を明示している。

道に藍・朱色で色分けしてあるのは大阪町中の案内ではあるが、200を超える場所を1日で見物できる筈もなく、時間にゆとりがある人、短時間で見物する人の立場で色分けしてある。案内人に頼む場合は客の好みを聞き、時間に合わせて集中的に見物することになる。しかし今と違って住所表示板が存在しないから、大体の見当は「浪華名所獨案内」に示されている河川、橋、道、など目立つ建築物が住所板の代わりになる。

『東海道中膝栗毛』八編¹¹⁾に弥次郎兵衛・喜多八が案内人の左平次と大阪見物について、やり取りを交す場面を見ると

左平次「ナント斯いたしましよ。天王寺生玉は住吉御参詣のときに、おまいりなされ。

弥次「モシ、わっちらア二三日も逗留して、所々見物がしたいから、おたのみ申やす

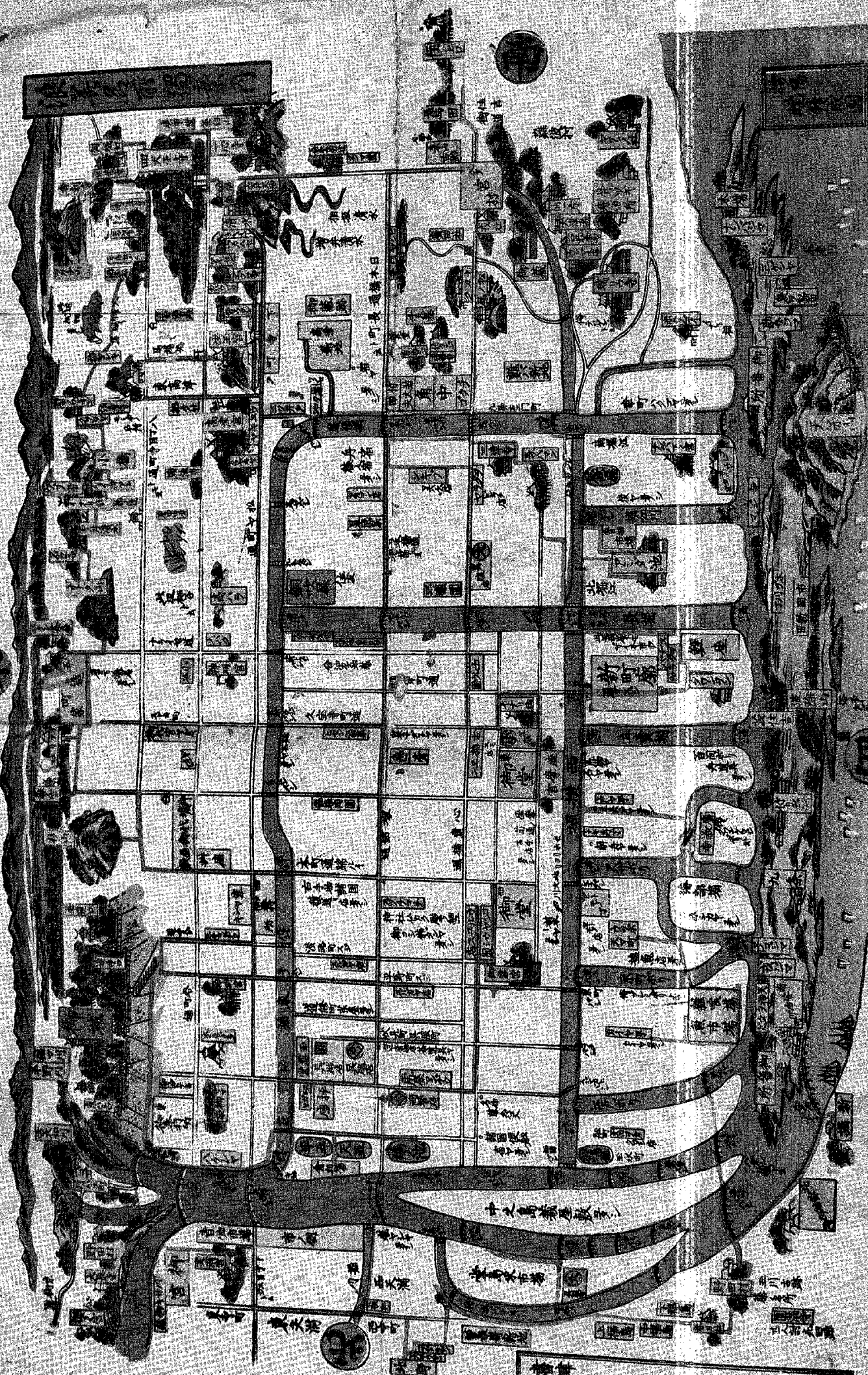
弥次郎兵衛・喜多八が長町に宿泊した折りに案内人左平次に相談をなし、左平次が見物の予定を一部分喋っている様子だが、文政8年、伊勢参宮をした記録に

正月17日、大阪長町にて伝法屋喜兵衛で一泊164文を支払う。

正月18日、逗留をすることになり、案内人には宿泊料金と同額の164文にて頼んだ、

10) 山東京伝「箕間尺三人生酔」(増田次太郎『引札繪びら錦繪』)、誠文堂新光社、昭和56年9月。

11) 注3)に同じ。



名所・古跡を見物。

このことから1人であれば164文を支払い、案内してもらえることになる。

来阪者は〈伊勢参宮〉〈西国三十三ヶ所〉の道中記にまとめられた記録をみると参詣後、大阪見物は神社・仏閣が目立つ。それ以外に来阪した者は違った見物もある。実際は遊里へ遊びに行っても記録に残さず記載されていない事は十分納得できる。

各種、道中記に〈鴻の池一金持〉とあるのは評判記、持丸長者鑑等の影響により全国的に名声が広まっていた。「浪華名所獨案内」には6店が紹介され、これらの屋敷の規模を見て驚愕した。実際、鴻池屋・天王寺屋は立派な家屋ではなかった。

〈平五〉(両替商、平野屋五兵衛、今橋一丁目)

〈天五〉(両替商、天王寺屋五兵衛、今橋一丁目)

〈鴻池〉(両替商、鴻池屋善右衛門、今橋二丁目)

〈米平〉(両替商、米屋喜右衛門、内平野町二丁目)

〈加嶋屋〉(両替商、加嶋屋久右衛門、玉水町)

〈辰巳屋〉(金融、辰巳屋久左衛門、吉野屋町)辰巳屋は両替商ではないが手形を多く扱うために「大阪両替手形便覧¹²⁾」にも掲載されている。

鴻池以外にも有名な金持ちは、鰻谷方面の住友で、住友の銅吹屋も銅の精練と共に南蛮吹きと云って純度の高い棹銅を造り、豪商としての地位を不動のものとしていた。

桜橋南町にある〈大丸まつや〉は㊤呉服太物類、堂嶋渡辺橋筋角。

心斎橋筋西側にある〈大丸まつや〉は㊤呉服太物類、心斎橋清水町角。

高麗橋筋南側には㊤呉服太物類、〈三ツ井えちごや〉が高麗橋堺筋東へ入。

同じ高麗橋筋南側に㊤呉服太物類、〈岩城ますや〉が高麗橋一丁目。

東御堂南側には㊤呉服太物類、平井小橋屋、御堂前北久宝寺町角にあることは『商人買物獨案内¹³⁾』文政七年も教えてくれる。

高麗橋三井両替店の南側に〈虎屋饅頭〉(饅頭切手で有名)虎屋伊織、高麗橋中橋筋西へ入。

二ツ井戸西側に岩おこしの〈ツノセ〉大阪道頓堀二ツ井戸西に津国屋清蔵。

西長堀川西に船町の〈高オカクワシ店〉は饅頭・羊羹を販売した銭屋平右衛門、船町西横堀西へ入った所。

追手筋に面した〈大手饅頭〉も虎屋と同じ饅頭切手を発行した有名な饅頭屋で御菓子調進所、吾妻屋近江大塚。

淡路町筋〈スルガヤ店〉は御菓子所、駿河屋、大阪淡路町壱丁目、平野町筋北側の〈スルガヤ店〉も菓子所。

長堀川南側の〈三臓圓〉は人参三臓圓、法橋吉野五運、鰻谷三休橋西へ入。

心斎橋南側の〈五龍圓〉は鎮火五龍圓、浮田桂造、心斎橋筋順慶町。

〈ウルユス店〉はオランダ製のウルユスは肥後屋丈右衛門、淡路町心斎橋通西入。

〈古梅圓〉は老舗で名を知られた筆墨所で筆墨所古梅圓、松井、心斎橋南久宝寺町角に

12) 黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第五輯「大阪両替手形便覧」嘉永2年、清文堂出版、昭和59年9月。

13)『商人買物独案内』文政7年、大阪商業大学商業史博物館。

あった。

心齋橋筋大丸まつや呉服店南側の〈小倉屋〉と、長堀北側のオグラヤは「をくら油」鬢付けとして長堀問屋橋北詰の小倉屋歌兵衛、心齋橋筋菊屋町の小倉屋平右衛門。

〈シキブ〉は「御まゆはき」大津屋藤兵衛、大左エ門橋ノ三丁北に女性の美顔のひとつとして眉毛に塗る墨と筆を販売している。

〈玉露堂〉は扇屋。

小橋が特に名高いのは七墓廻りの一つに数えられ、〈梅田三昧〉〈浜墓所〉〈葭原墓所〉〈蒲生墓〉〈小橋墓所〉〈鳶田墓〉〈千日墓〉があり、他にも高津等があるが規模が小さくて七墓に入れない。「浪華名所獨案内」では小橋・千日・鳶田を確認した（小橋千日浜墓、七処一ツにしたりとも、¹⁴⁾）。

谷町通り西側、釣鐘邸として知られる、邸の一角に〈望火の高楼〉を造り、出火があれば半鐘を打ち鳴らした。上町台地の比較的高い場所に位置し、市中を見回すには最適地であった。

〈庚申塚〉は古蹟で、このあたりは桃谷の地名がつく、南側付近に東西に伸びた〈カラホリ〉（現在は空堀商店街となり、西は松屋町筋より東は谷町筋を超え、旧桃谷小学校付近迄小売店舗が連なっている。）があるが、3月頃には桃が咲き、また梅林もあって当時の人々の憩いの場であった。

玉造町家の下に〈唐弓ノ弦屋多シ〉の文字が見える。玉造の家では主に婦女子が鯨の筋（鯨の筋を水に浸して割く、糸になったものを撚り合わせる。）を割いて、弦に製したが他地方にない浪華の珍しい仕事と云えるかも知れないが、玉造の東に河内があり、木綿の生産は全国的に有名であるが地域的な産業をうまく生かした。

実綿を綿繰り機により綿と種を分離する。次に綿をほぐすが、綿の繊維をほぐすのに木綿弓を使用する。その木綿弓の弦を生産している。

真田山の東側に〈二軒茶屋〉があり、ここは伊勢参宮に出立する時に、暫しの別れと酒宴をしたり、信貴山の月参り、生駒の浴湯詣、奈良の晒売り、河内通いの木綿買いなど多くの人が往来し、大いに繁盛をした。玉造の東出口に、街道を挟んで二軒の茶屋があった為にこの名がついた。

〈二ツ井戸〉は道頓堀川堀止めに二箇に仕切って用水となし、近辺の人々に親しまれていた。〈二ツ井戸〉の奇観も手伝って観光名所に組み込まれた。松屋町筋は寺社の参詣遊客、商人が通り賑わった町である。

二ツ井戸の東に〈ウエキヤ〉があつて、庭中が非常に広く林のような感じであった。浪華には植木商売は下寺町・天満・北野・曾根崎・難波新地等にあるが特に高津の松井吉助は和漢の名木を植え、香木も船で積送していた。庭には草木が植えられ、四季を通じて花が咲き乱れていた。そのため種樹屋花園（うえきのはなぞの）と呼ばれていた。鴻池屋・加嶋屋・辰巳屋に出入りをしていた。

〈クロヤキヤ〉は高津神社の西坂にあり、鳥・虫・獣などを全部黒焼にして売る、人々は黒焼の効能を信じて店頭で群がった。鶏成の句にも詠まれていて

14) 野夫鉄格子「戯動大丈夫」（金子和正・大内田卓郎他校訂・編『浪華粹人伝』）、上方藝文叢刊刊行会、昭和58年1月。

高き屋にのぼりて見れば烟たつ 是も名におふ黒やきのかま

高き屋（茶店）の眼下に黒やき屋があり、少し西へ眼をずらすと道頓堀川・芝居の櫓が見え、更に遠方には家屋と烟が入り混じった風景が広がっていた。（図1、図2）

生国魂神社の東側に〈梅ヤシキ〉と呼ばれ、文化の初めに東都亀戸の梅屋敷を模した。四天王寺・生国魂神社・高津神社の近辺に位置し、便利な場所にあり、園中に梅を植樹し、二月頃になると宴席にもよいし、風流人にも好まれ、遊興の楽しみとして活況を呈した。梅屋敷を詠んだ歌に来山・宇山・魯九・諷竹の歌が残る。

〈増井清水〉〈相坂清水〉は七名泉に入っているが増井清水は清水寺の下南にあって門には増井の額が掲げてある。相坂清水は荒陵の地水西にあり、灑水と云われ、取量でも枯渴することはない（天王寺の三水の中で随一）。金龍清水は北泰聖寺の内にあって清泉にして甘味であって、勝手に汲むことを許されなかつた。安居清水は絵馬舎の下にあった。土佐清水は土佐の大守がこの地を買い、四面を囲い錠をおろし、土州御用水と標札を作った。高津清水はいちめい寺島名水とも云われ、南瓦屋町寺島家の邸にあった。

〈キヨミズ〉の北に〈ウカムセ〉とある。浮瀬（うかむせ）は新清水の坂の下にあって、西南の地にあるから眺望もよく庭に植樹された花・紅葉など年中花が咲いている。この宴席で遊客を慰めた。主は浮瀬四郎右衛門といい、遊宴の貨食家で有名。西門筋一心寺前北側に貨食店福屋亭があったが明治維新の初めに両亭共廃滅してしまった。

道頓堀で有名な芝居は西より〈筑後〉・〈中〉・〈角〉・〈若太夫〉・〈竹田〉とある。

図1 攝津名所圖會大成 卷之四 高津神社

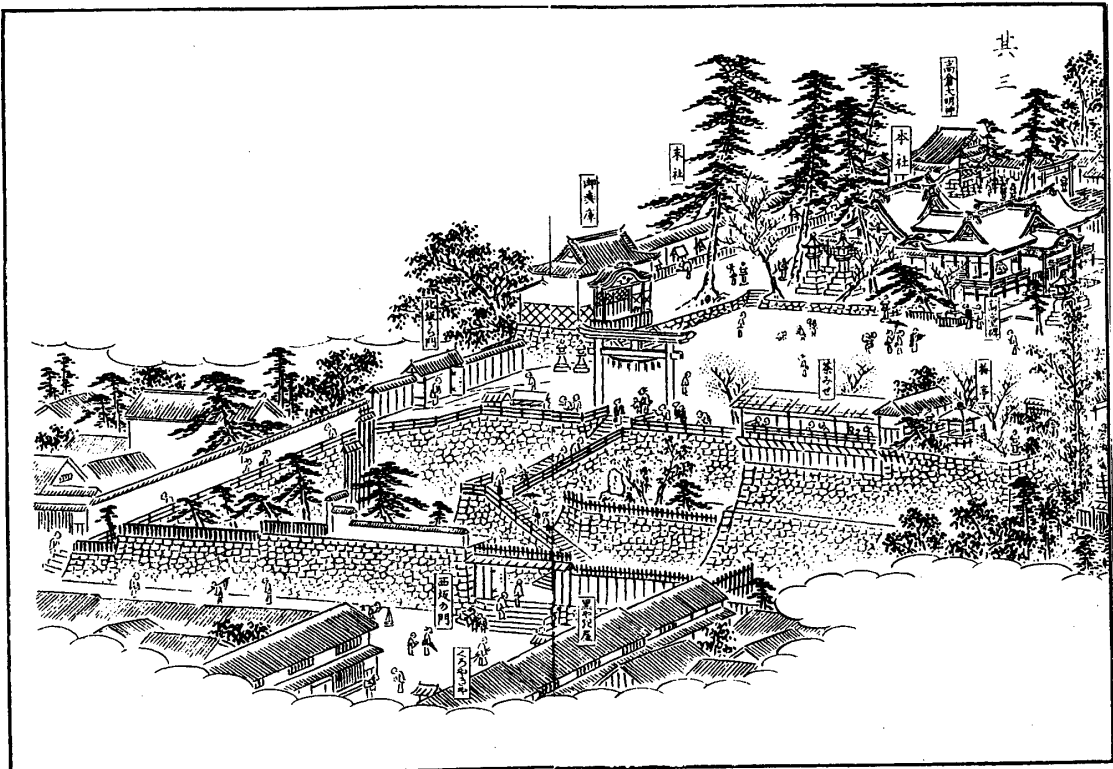
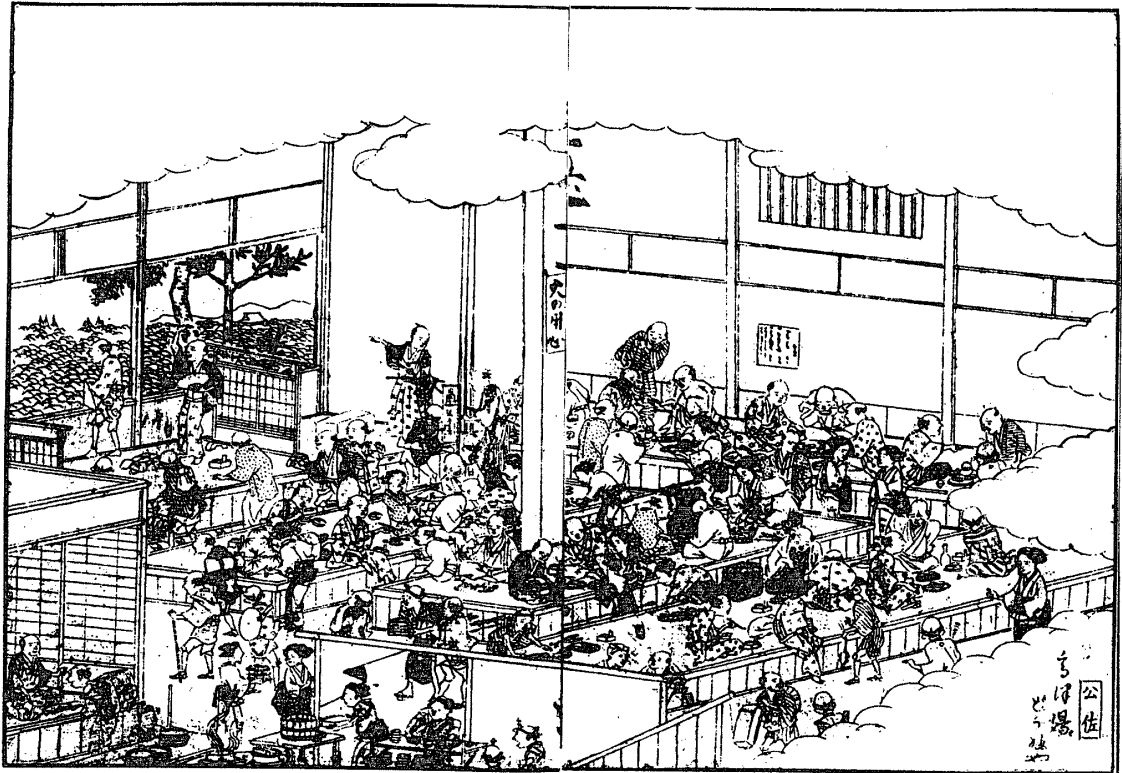


図2 攝津名所圖曾大成 卷之四 高津湯どうふ屋



筑後劇場は西の端にあるから大西とも云われ、竹本筑後椽のあやつり座。歌舞伎を興行する。

中の劇場は通称中座とも云われ、塩屋九郎右衛門の歌舞伎座にして大歌舞伎という。角の劇場も通称角座と云われ、中座同様大歌舞伎。若太夫劇場は豊竹若太夫浄瑠璃の操の座、歌舞伎も興行。竹田劇場は竹田近江のからくり芝居、後に歌舞伎も興行する。(図3)

難波新地と少し大きな枠をとっているのは曾根崎新地と同じ理由で、難波新地小見世物として軽業・力持・機関・軽口・ものまね・足芸・籠抜け・こままわし・鯨骨の細工・羽根細工・陶器細工・紙細工などがあり。商品は草木・禽獣・人物・玉殿等を制作した。見世物小屋のある関係から休憩所として水茶店、他に煮売屋・泊茶屋があり、昼夜共に賑わっていた。

難波新地南側に〈御蔵〉、高津新地南側に〈御蔵跡〉の利用は扶持米を収めた場所。寛政4年に(難波)新御蔵ができる。船入川を新川と云う。以前あった蔵は天王寺御蔵跡とよばれている。

難波村の北に〈瑞龍寺〉があり、正式名は「慈雲山瑞龍禅寺」。寺歴は黄壁派禅宗鉄眼和尚の開基として知られている。

この寺の南に〈骨筋違療治所〉があり難波整骨家として難波の骨接は土地の名物とまでなっている。治療がうまく遠国より怪我人が籠釣台に乗り、近在の農夫、市中の人々が番号札を求めて療治庵の順番を待っている。しかし、待つ人が多く、庭から門前にまで溢れる程である。また、治療に来る者の中で相撲とりや役者、芸子は一際目立っていた。(図4)

図3 浪花のながめ 卷之三 日本橋

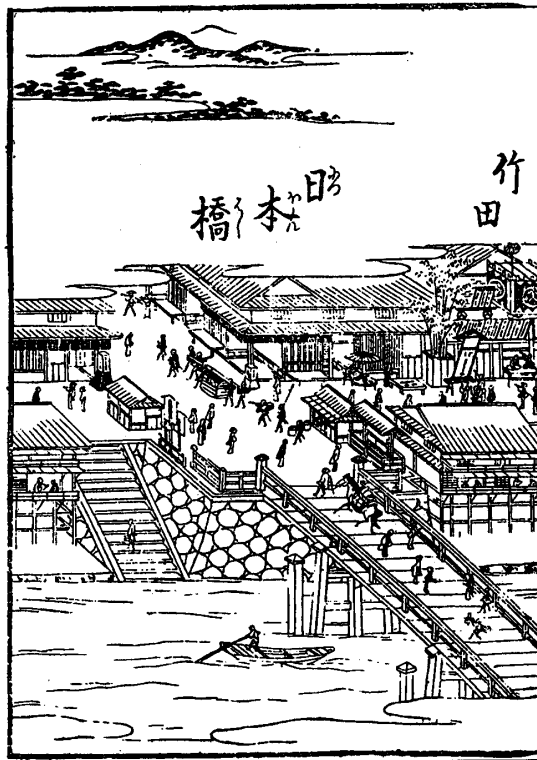
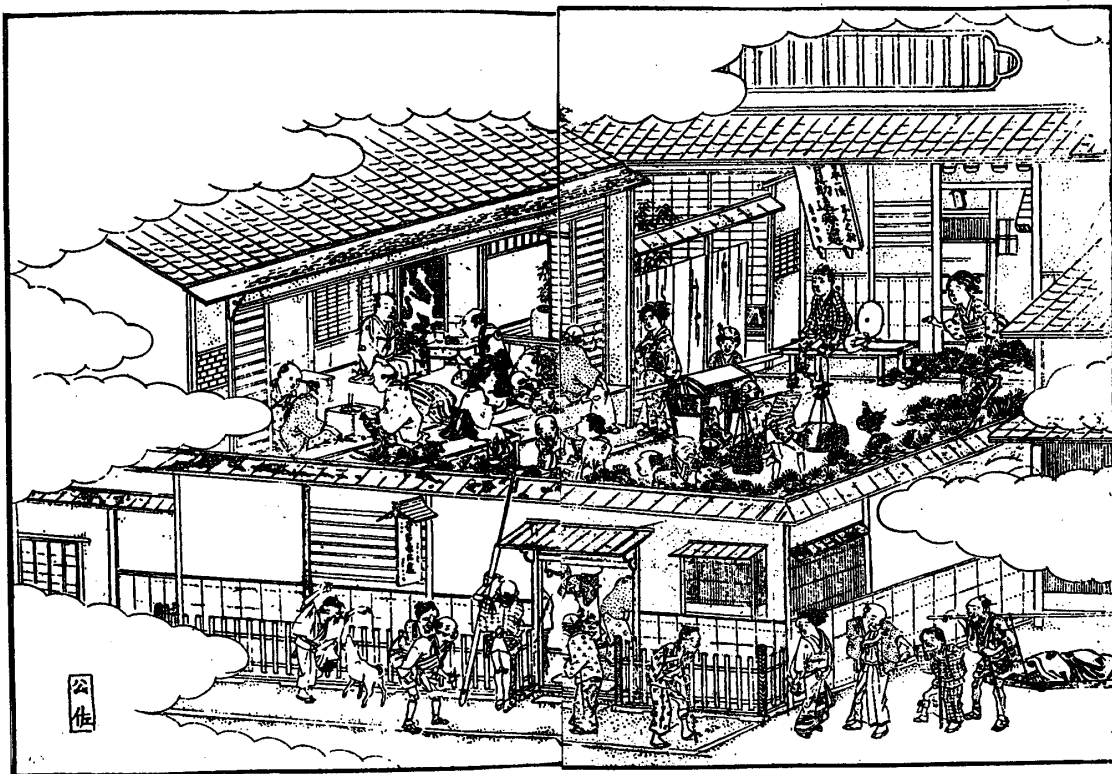


図4 攝津名所圖會大成 卷之八 難波整骨家



骨接家の東に〈大津湯〉があり、温泉ではないが薬湯の養生所で効能が多く湯治する人も多い。居間では飲食・音曲・諷い、舞って鼓をうち、弦を爪弾き踊る。その賑わしさに鬱病もすぐに全快するという。

大津湯の北側に〈豆茶や〉があり、十辺舎一九も『東海道中膝栗毛』八編上にて、〈豆茶やに腹をこやし〉と引用している。大阪で暮らしている時に一九も腹のこやしにしたかも知れない。

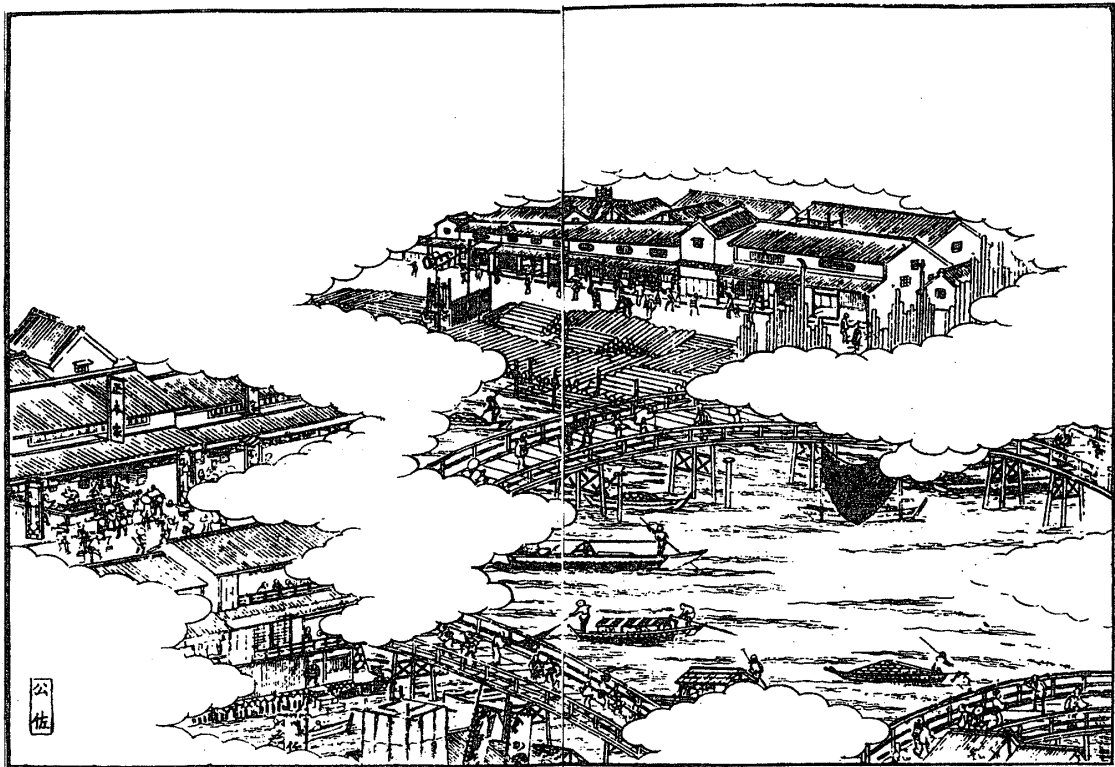
瑞龍寺の西に〈赤テノゴイナリ〉と意味不明の稲荷がある。難波村の田圃の中に位置し眺望もよく、靈験あらたかとして参詣人は多い。世人は「赤手ぬぐいの稲荷」と称して古い祠で非常に有名。

四ツ橋下に〈名ブツキセル〉と印字されている。遊び客が土産に買っていく正本家をはじめ二三十の煙管店から煙管を買う。名物煙管として此の地がつとに有名になり、播磨屋源蔵を以て根元をなし、土地の繁盛に従い類店が多くなってきた。因に文政七年『商人買物独案内』に四ツ橋と名のついた店は14軒を数える。(図5)

四ツ橋は大阪人に説明の言を要しない。西横堀川と長堀川に、上空から見ると十字の形になっている。西横堀川に「上つなぎ橋」「下つなぎ橋」、長堀川に「炭屋橋」「吉野屋橋」の四橋の総称、夏には四ツ橋の上を歩いて、納涼・観月の風景を楽しむ。四ツ橋の歌も多く残っている。

「雑喉場魚市場」他に「堂島米市場」「天満青物市場」北堀江「青物市場」と官許された。魚市バ・下船場雑喉場、米市場・堂島新地二丁目浜通、青モノ市ハ青物市場・天満、永代

図5 攝津名所圖會大成 卷之九上 四ツ橋煙筒舗



浜下船場靱塩干魚の陸揚場、川魚市場上町京橋北詰、同じく下船場江戸堀下ノ鼻築地、最後の北堀江にある青物市場は若干の傍証を要する。

元禄11年に堀江新地を開発、北堀江1～5丁目、南堀江1～5丁目、御池通1～6丁目、橘通1～8丁目通筋の名だけで、『大阪市史』第一¹⁵⁾ 第四編徳川時代には、たゞ堀江新地に青物市場二ヶ所を許可し、(御池通二丁目及橘通一丁目にあり、後共に廢す)『大阪市史』第二¹⁶⁾ 第四編徳川時代に文化初年の調査として大阪諸株の一覧表があつて、そこには堀江青物市とある。

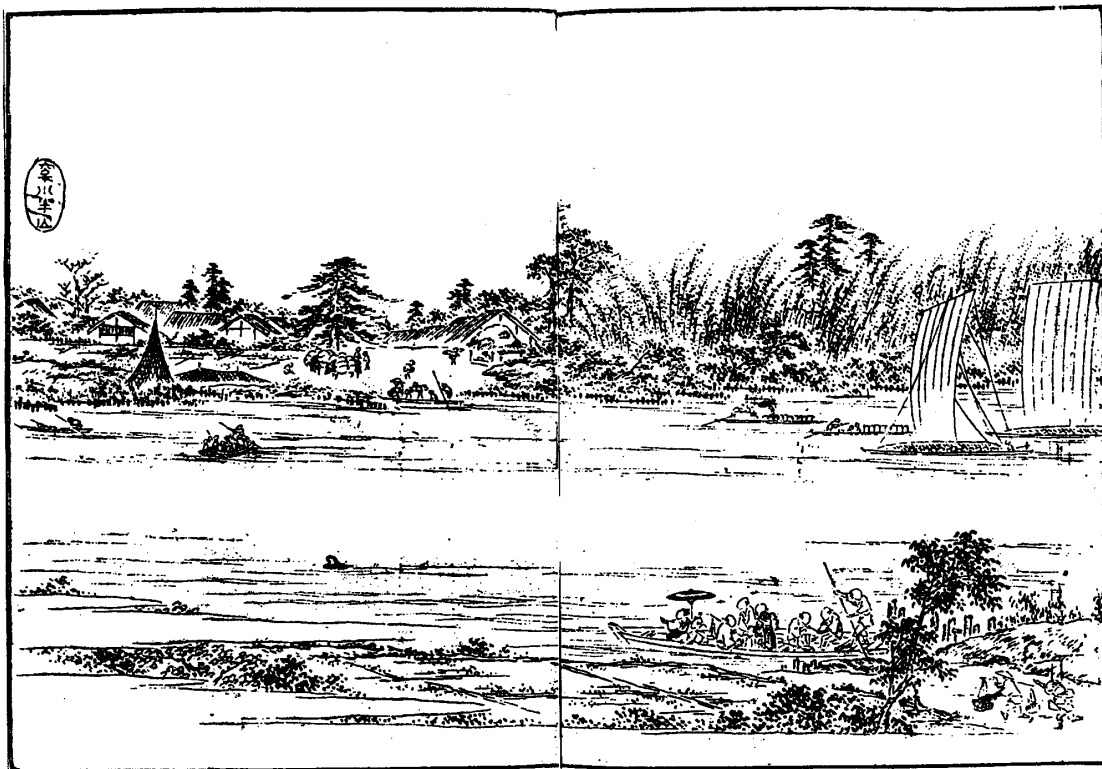
別に、問屋組合再興後の調査(嘉永5年)では 一堀江青物市問屋貳人と明記されている。青物市の関連としては各場所で設置運動があつたが、天満側からの抗議もあり、設置まで許可されることに困難がつきまとつた。

『摂津名所圖會大成』卷之九上¹⁷⁾、安政2年以後に堀江市之側として北堀江二丁目にあり、青物市場として天満の市にひとしく野菜及果実を地方より運送して商売をしていると記述している。

鰹座は新町遊廓の西にある。獨案内に〈クワンラン〉と鰹座の東西三丁の間に鰹ぶしの店が軒を並べている。

〈スナバ〉は新町廓西口の南にあつて、往昔の砂場、この近辺に名物の蕎麦屋があり、家庇を蠣殻にて葺いている。難波名物の一つとなっている。

図6 攝津名所圖會大成 卷之十一 長柄川渡口



15) 大阪市役所蔵版『大阪市史』第一、清文堂出版、昭和53年11月。

16) 大阪市役所蔵版『大阪市史』第二、清文堂出版、昭和53年12月。

17) 船越政一郎編『攝津名所圖會大成』卷之九上、浪速叢書刊行會、昭和3年8月。

淀川の東に桜の宮があり、対岸を渡るには世に有名な〈源八ワタシ〉を利用することになる。「天満源八ワタシ」は天満源八町と中野村との間を渡る。淀川にあって〈ワタシ〉とあるは川崎渡しのことか。

源八ワタシと関係が深い櫻ノ宮は境内のほとりに桜を植樹して名高くなった。(図6)

大川に面した南に〈金相場〉があり、官許という点は高麗橋、岩城呉服店の北側に〈秤座〉があり船場高麗橋一丁メ、上町内本町太郎左衛門丁、谷町通と本町通りの交差に〈榎座〉がある。獨案内にはないが他に銀座・上町両替町、常是・上町鈴木町、朱座・船場本町一丁メ(俵物会所・船場北浜一丁目、家請会所・船場亀井町)がある。

淀屋橋南方面に「名物革煙艸入」、またもや土産物品が登場する。名物という名に恥じず、購入者は御霊宮に拝礼、金毘羅参詣の渡海船、明石よりの通船で旅宿も多く、遊参の人達が土産を買う対象者となる。

松屋町筋に〈ノバク〉〈高ハラ〉があり、高原の範囲は末吉橋通り、南側は空堀より北、西側は松屋町裏町より東、東側は瓦屋寺島藤右衛門請地の西側(御祓筋)に位置する。高原とよばれる区域の東南角に非人小屋があり、それ以外が俗に高原と呼ばれていた。高く盛り上がった地形をしていた事も起因している。「広漠」故に高原とも野漠とも云う。

3. 来阪者の見物跡追

文久2年に鹿島郡から伊勢神宮に参拝した記録で「参宮拝礼帳¹⁸⁾」が残っている。6月11日に鹿島大神宮に参詣して道中安全を祈願し、出立した。

8月2日に大阪御城下「大和屋」へ泊り、清水寺・一心寺・天王寺(四天王寺)を参詣している。8月2日・3日の両日で廻ったか、1日半で廻ったかは不明である。

清水寺は通称名、宝永年中に阿闍梨延海が京都清水寺の別院にて、十一面観音を遷して新清水寺を建立する。西の崖に舞台あり、ここから西の方は眺望もよく、南手は紅葉、阪下には人工の滝があって夏は涼しく、境内に「八百松楼」という料亭がある。

一心寺は圓光大師の開基で本尊阿彌陀如来がある。宝物は法然上人一紙三行の六字名号は上人が天王寺西門の岸に新別所を建て日相観を修したときに筆をとったとある。天王寺(参詣)は四天王寺の別称。四天王寺の境内には見物すべき場所が多く、九十近くあるうか。石鳥居・納骨堂・布袋堂・西大門・南門・萬代池・仁王門・五重塔・金堂ときりがない。四天王寺に参詣し順拝するなら、ここだけで一日はついやすだろう。

文久3年常陸国信太郡阿弥村の野口市郎左衛門を含めて7人の遊行となり、「道中日記帳¹⁹⁾」にまとめられている。

史料A 2月22日に土産でも買いに行ったか、〈掛け値〉の話になり、大阪の店先に掲げている看板に〈元銀掛値〉なしと並んでいる品物に安いようにみえるが、本当は皆掛値をしている。(値段は京師も大坂も別に違いはない。けれども京師は口先はうまいが心がねじけているので、商品も掛け値が多く、正札といっても当てにならない。買う人によっていろいろ悪い品を売りつけ、(後略²⁰⁾)と野口市郎左衛門は考えていた。

18)「参宮拝礼帳」(川崎吉男編『伊勢参宮日記考』上)、筑波書林、1987年11月。

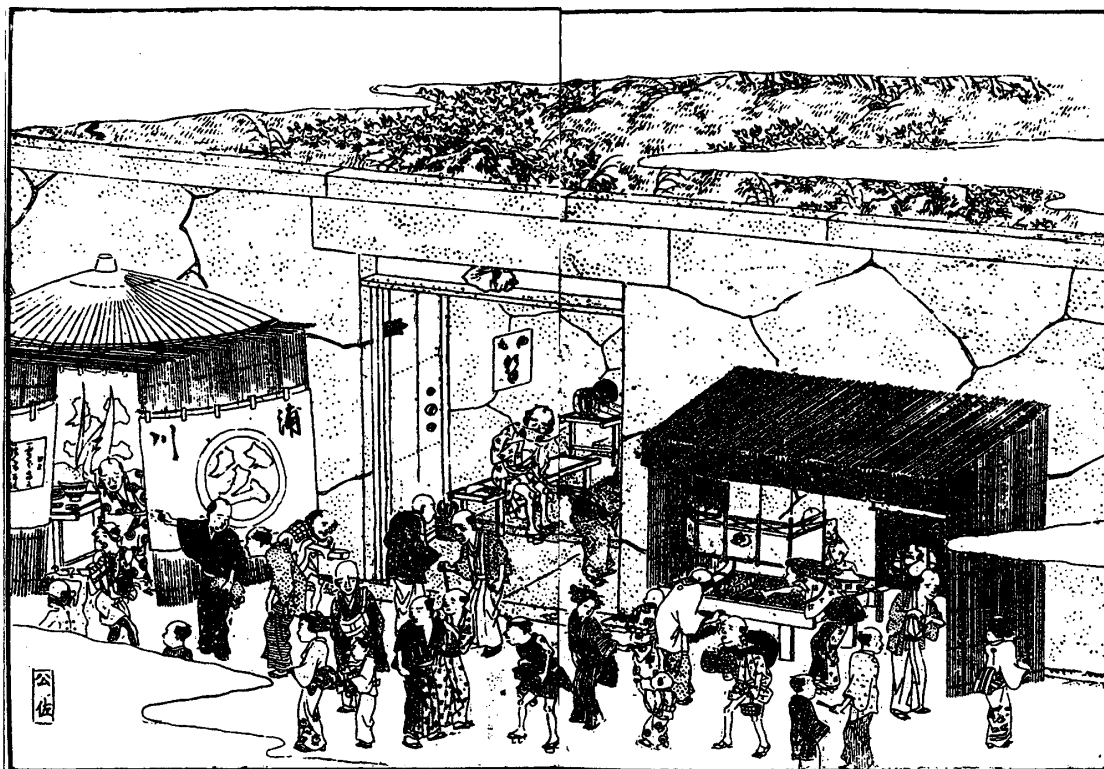
19)「道中日記帳」(川崎吉男編『伊勢参宮日記考』上)、筑波書林、1987年11月。

2月23日は西本願寺・東本願寺を参詣し西本願寺・東本願寺は有名な寺だから参詣人で混雑している。(図7)〈加嶋屋久兵衛〉金持と記載しているが、加嶋屋久兵衛は寛政11年の『手形便覧』に「八けんや」の住所に記載されている。

2月24日は大変忙しい1日で行7名は200文で案内を頼み大阪町中を見物した。

史料B 1 道頓堀に芝居小屋五座が並ぶ。(図8) 2 高津神社は高倉稲荷大明神を拝み。3 清水寺で観世音を拝観する。4 四天王寺に行き五重塔にのぼり4階からの大阪市中の眺めは素晴らしく、1人16文を寄付する。錦を織ったり、境内の「人形魚」に昇り1人12文を寄進。(図9) 5 妙法寺の門の内に松があり、大阪一番の松と呼び声も高く「浪華名所獨案内」には妙法松として描かれている。(図10) 6 大平崎に真田の抜け井戸がある。7 大阪城の城代は松平伊豆守様、出は三州吉田の城主で御城を拝見し、御堀はやげんぼりと云う。8 昼食は天神橋にある長谷川屋力蔵で銭150文を出銭する。9 文久2年8、9月の両月 金1両は銀78匁 米1石は銀200目 薪40貫目は2貫7,800ぐらい 大阪はかりは銭相場が定まっていない。但し朝と日暮れで違う。(大阪の銭相場は朝と夕暮れで異なることを知る。金相場会所にて、午前に金相場があり、昼から銭相場が立つ。ここは金相場と銭相場を同じに考えている。) 10 呉服屋(心斎橋通りの大丸屋に行き、呉服ものを2両2分ばかり求めた。さらしや織物の類はことに安いように思われる。すべて大店は広いけれども人声がさわがしく、²¹⁾として知られている〈岩城屋〉〈越後屋〉を見る。

図7 攝津名所圖曾大成 卷之十三下 南御堂裏穴門



20) 清河八郎「西游草」(小山松勝一郎『西游草』)、平凡社、1994年10月。

21) 注21) に同じ。

図8 浪花のながめ 卷之三 道頓堀芝居の図

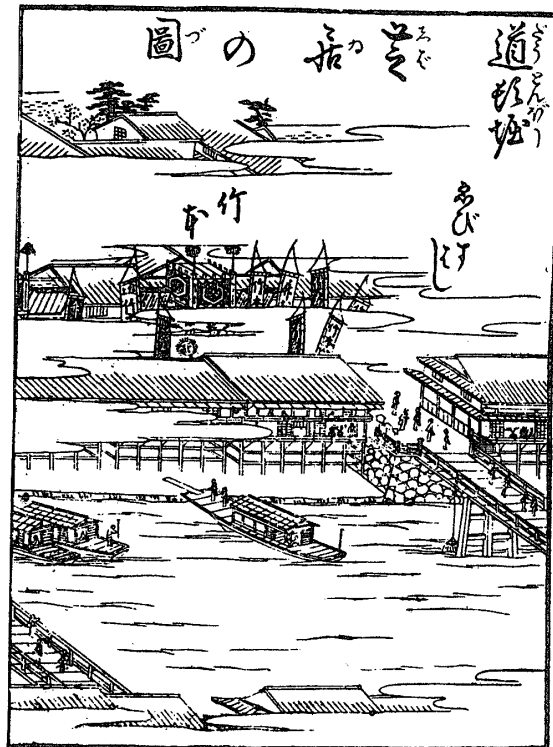


図9 攝津名所圖會大成 卷之五 萬代池

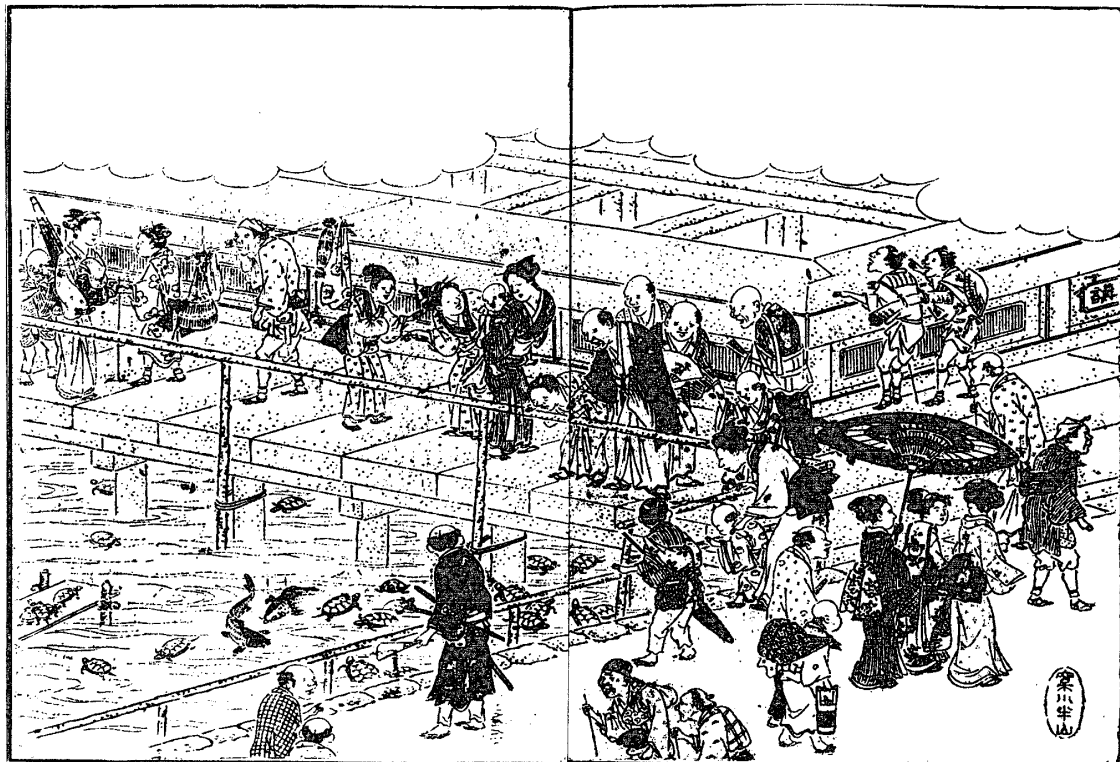
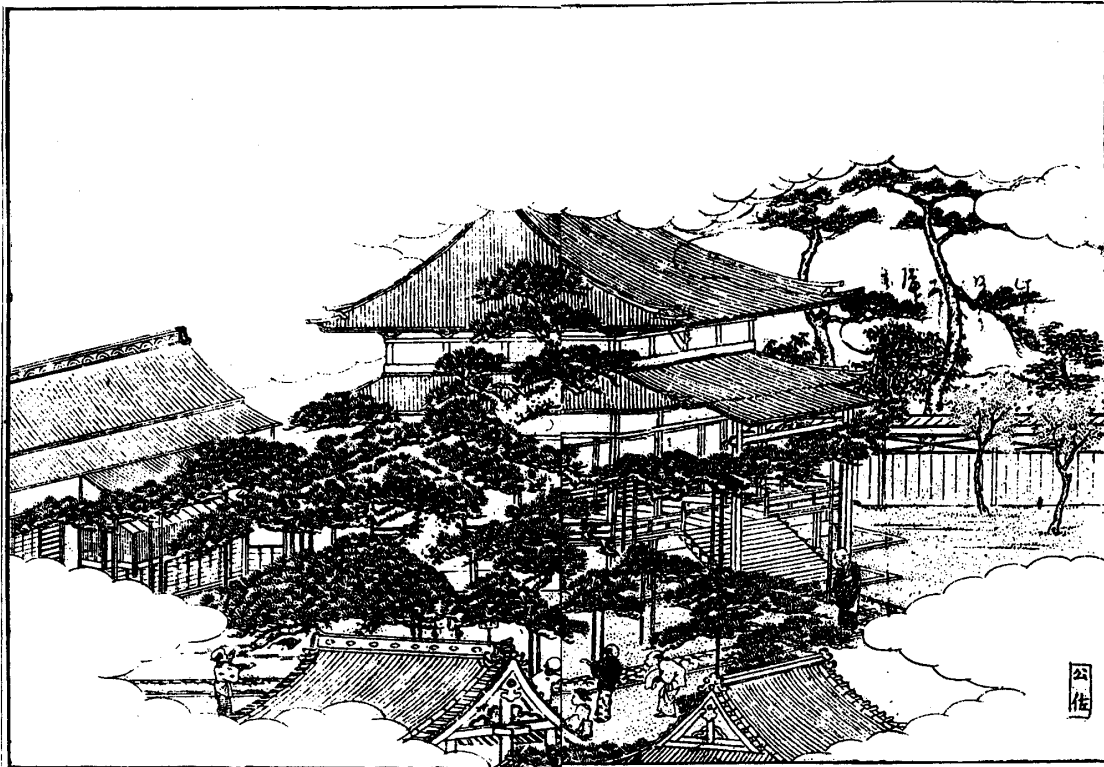


図10 攝津名所圖會大成 卷之四 妙法松



11 今橋通り二町目、鴻池善右衛門—日本一の金持と記され、屋敷を見学し、店を出入りする武士・町人の姿をじっくり見ただろう（大金持の天王寺や鴻池の門前を通り、その粗末なのに驚いた。²²⁾）。 12 土産にするのか、帰村して自分で使用するかは別であるが、御堂筋南本町角の播磨屋佐輔宅で「柳行李一ヶ」を金1朱と250文を出して購入した。 13 すぐ近くの四ッ橋にて名物煙管を銭272文で求め、更に、同じ四ッ橋で広嶋屋彦兵衛は銭154文を支払い瑪瑤を買う。 14 木綿橋に金持ちと名高い辰巳屋を見学後、 15 「稻荷芝居を見る」、実際に芝居を観劇したのではなく、荒木劇場跡を見た意味、荒木芝居は明和年間から文政年間迄の活動、路地の奥に稻荷の小祠があったのでこの名がついたと推測する。

史料C 安政3年に木内清左衛門が大阪にて道頓堀大和屋弥三郎宅に宿泊して「西国道中日記帳²³⁾」にまとめた。

7月5日は昼食に100文を支払い、別に32文を出し、酒と肴で楽しむ。

15文で紙を購入。200文を出して案内見物を頼む。 1 なんばが池 2 天満宮 3 東本願寺・西本願寺 4 砂場近辺にある名物蕎麦 5 虎屋饅頭で休む 6 新町（廊を見物） 7 鴻池宅の町を通り 8 大阪城に行く、四方は白壁、八つ棟作り、矢倉23あり、百万石の御城。

22) 注21) に同じ。

23) 木内清左衛門「西国道中日記帳」（安政3年。ここでは、海上町史編集委員会『海上町史研究』29収録による。）

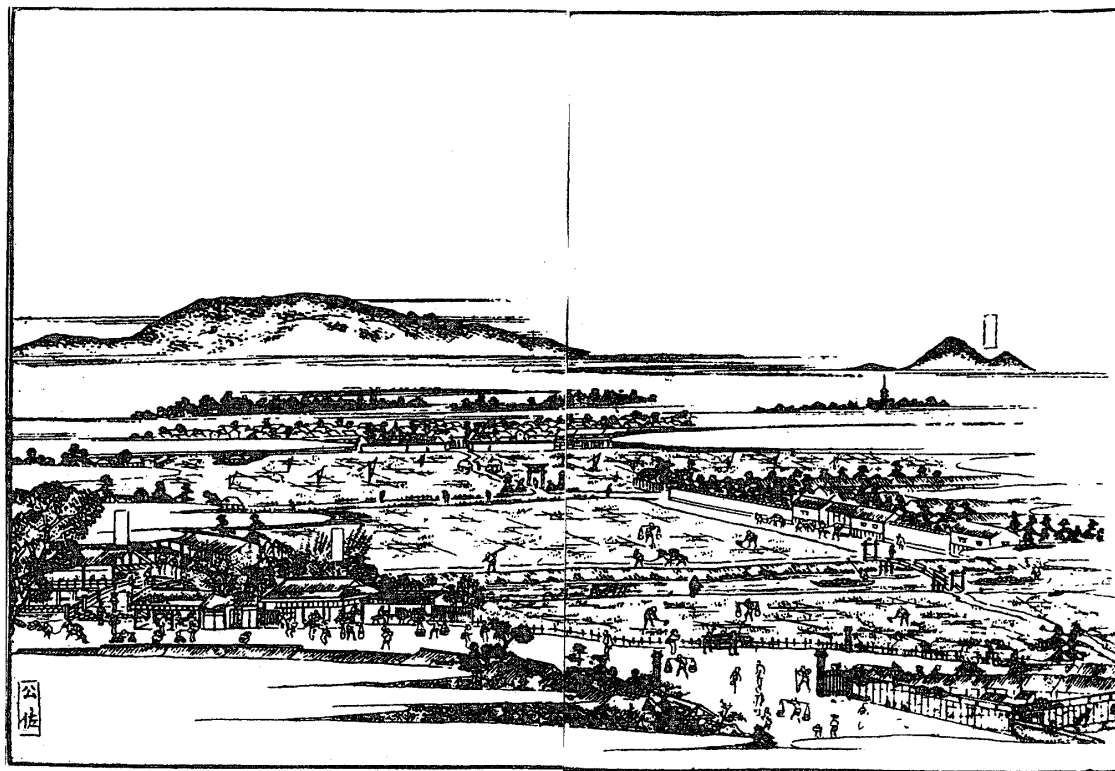
下であることを認識しつつ立ち去る。

史料D 同5日泊り、200文 同大和屋弥三郎宅で宿泊する。24文で酒。24文でわらじ代を支払う。宿泊した夜から雨が少し降った。5日早朝五ツ時に出立する。下寺町・中寺町にかかり、四天王寺に参り、五重塔に15銭を支払って登り、大阪を見渡す。庚申様に参り、その他近所にもいろいろ参る。次に平野へ行き、平野村常念仏を参る。

史料E 耶麻郡大谷組利田村吉兵衛等が9人で文政13年正月9日伊勢参宮に出かけた²⁴⁾。長町木賃宿に宿泊するが伝法屋喜兵衛の出店が堺方面にあったらしく、「川ちや金十郎」と名乗る。この店より案内人を頼み1人5文ずつ、全部で45文と割安の感がある。(図11)

2月25日、26日の二晩を長町、伝法屋喜兵衛宅で宿泊する。一行が2月26日に大阪見物に出かけた。1 なんばが池、これは通称あみだ池と云われ(蓮が多く花盛の頃は薫花があたりを包む、信州善光寺の彌陀如来出現の古跡だと云う。)正式名は蓮池山和光寺。(図12) 2 四ツ橋界隈に十数軒の煙管屋がある。3 そして珍しいのは「みなと見物」として寺嶋の見えるあたり迄「船」を見に行ったのか。(図13) 4 「幾玉みこと」は生国魂神社 5 寿なはの蕎麦名物は新町遊廓の西に名物のうどん蕎麦店の津国屋作兵衛・和泉屋太兵衛が有名であるが砂場の蕎麦としてつとに有名。6 西・東本願寺をお参りするの

図11 攝津名所圖會大成 卷之八 長町裏

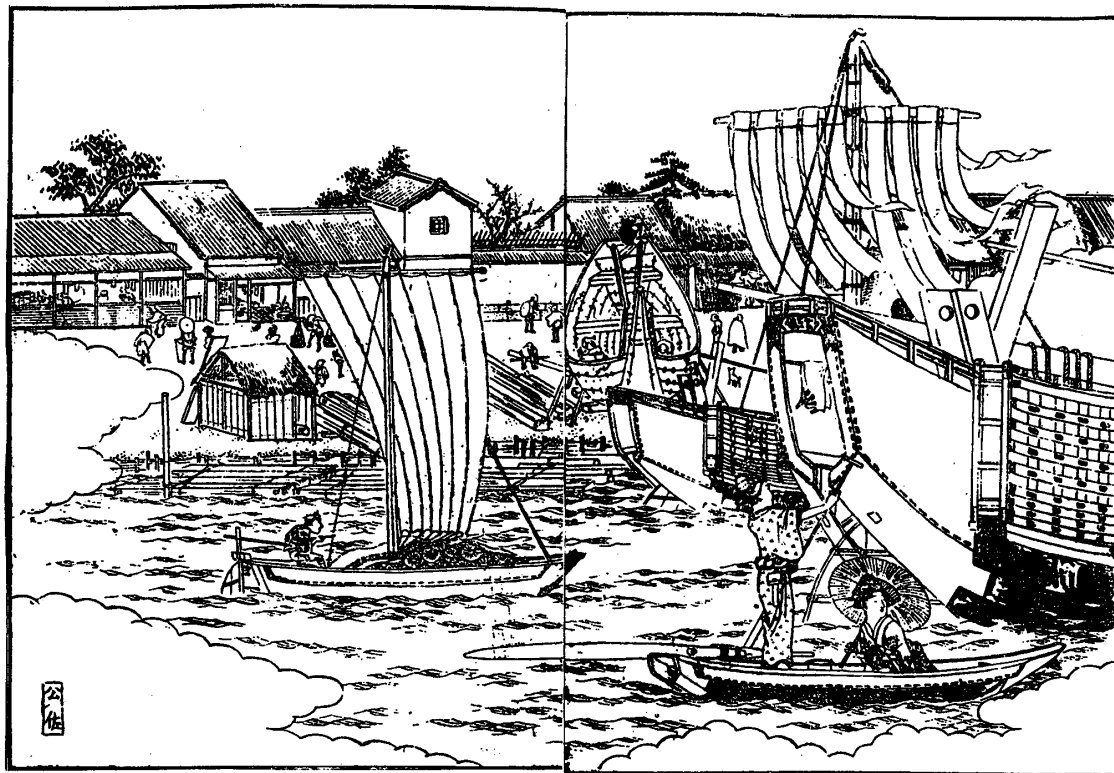


24) 「伊勢参宮道中日記帳」(文政13年。ここでは、海上町史編集委員会『海上町史研究』29収録による。)

図12 浪花のながめ 卷之三 和光寺



図13 攝津名所圖會大成 卷之九上 寺島



伊勢参宮者の特徴。7「高の池金持」は鴻池の意味。8「明法立花松」の読みはく妙法松と一緒で妙法寺の門内に植樹されている。9最後に道頓堀の芝居を観ることになる。翌27日はおきまりのコースとして天王寺（天王寺は四天王寺の別称）・平野へと辿っていく。

史料F 天保12年「伊勢参宮道中日記帳²⁵⁾」は前回つまり、文政13年に参詣後、12年経過したのである。文政13年の大阪見物は2日だが今回は正月22日、長町八丁目河内屋庄右衛門宅に宿泊し、1 生玉大明神（前回と同じ）2 仁徳天王の社（高津宮は宮跡しかなく、高津神社のことか）3 妙法寺法花宗（前回と同じ）4 座摩之神社 5 阿彌陀池（なんばが池・前回と同じ）23日は雨のため芝居見物となる。24日に大阪を出起して、天王寺、新清水観音を観て、平野へ行く。

4.『東海道中膝栗毛』に観られる大阪

凡そ一九は『東海道中膝栗毛』大阪の巻の構成はく風景としての大阪く飲食としての大阪く観劇としての大阪を観光案内人の左平次に展開を委ね、また、あるときは遠く眼鏡に写る情景を描き、夢想を膨らまし、弥次郎兵衛・喜多八を自由に子供心そのままに土地の上を動かしている。そのひとつとしてく性を旅の道中に織り込んでいる。例えば、巡礼の娘や飯盛女に対してちよっかいを出すことも旅の願望であり、新町に遊びに行った場面はその象徴でもあった。

「村」の共同体がく祭く五節句く年中行事に携わるのは、日常性からの安らぎであったり、休息に他ならない。

朝から晩まで日光と共に生活をおくり、息絶え絶えの中、く息抜きく娯楽の時間も少なく、もし、固有の時間を少しでも保有することができれば自己の夢を満足させたり、あるいは、他人の話を聴き入って、限りなく夢をなぞったことだろう。

近世のひとびとは、大きく分けて二つの虚構をもった。持続的に実在する虚構（悪所）と、非実在的な観念的・想像的な虚構（文芸）が存在することを『辺界の悪所²⁶⁾』の中で廣末保は指摘している。この考えを代弁するように大阪の人々は生活を楽しんでいた。そこには町村の人々と共有できる事もあった。

安永10年に書かれた「大阪奇珍泊²⁷⁾」によると、

士農工商夫々に、その職々を守りて里にとう餒の民なし。勤勞の余暇にハ、己に好々なる芝居有、能あり、角力有、或ひハ鼓をうち、笛を吹、或ひハ淨るり小歌謡をうたひ、又ハ駕に乗て寺院の花を詠め、また、徒歩してハ官閣の祭礼を拝し、軍書講談有、談義説法あり、沙魚釣に行ものあり、野がけにいづるもの有、他行をすかざるものハ家内に於て酒肴を取はやし、書物をくりひろげ、見ぬ世の人の有さまを目の前に見て、

25) 「伊勢参宮道中日記帳」（天保12年。ここでは、海上町史編集委員会『海上町史研究』29収録による。）

26) 廣末保『辺界の悪所』、平凡社、昭和48年11月。

27) 多治比郁夫校訂「大阪奇珍泊」（金子和正・大内田卓郎他校訂・編『浪華粹人伝』）、上方藝文叢刊行会、昭和58年1月。

いとなみのつかれを晴し、(後略)

引用文献の内容は多岐に渡り、劇・趣味への幅が広い。ここでは芸能部分から劇を選択する。

劇は日常性のない虚構が未知の世界へ引き連れ、現実を遮断する。しかし、簡単な物真似・戯言・見世物に我を忘れ、束の間の休息が気分転換をはかる。

〈観劇〉の大阪として道頓堀の矢倉五座は有名であるが、その他、神社の境内で行われた見世物も参詣者の心を掴んで離さなかった。

天満宮は「仙助が能狂言、忠七が浮世物真似、其外山海の珍見せ物、芝居、軽わざ、曲馬乗」があり。

生国魂神社では「見世物、はみがきうり、女祭文、東清七がうき世のものまね、其外さまざまあるが中には、栗餅の曲春は此ところを元祖とす」。

高津神社では寄進浄瑠璃もあり参詣の人をよぶ「サアへ、おはいりな——。これへ——。おやすみな——きしんじゃうるりの木戸「今じゃア——。紙屋徳兵衛天満やおはん、かはらやばし白木屋の段、次は千本ざくらの天川屋、弁慶の腹切、出がたりじゃア——²⁸⁾」

天満宮で行われた寛政の頃より京阪で辻能が盛んになり、堀井仙助は役者で芸は能に歌舞伎を加えたものだが時代の波に乗り二代目仙助の頃は歌舞伎化した。

忠七の物まねは軽口・物真似・たわいもない馬鹿な事を云い、顎をはずし、俳優のものまねをする。江戸では豆蔵声色、浪華では忠七の身振り物まねと云う。

曲馬に関しては三番叟・羅生門・見かへり他21通の曲馬(明和6年頃)がある。馬上にて片手で扇子を広げ、片手で馬の背にのっている。馬上に片足で立、別に馬上にて立、長刀を頭にかざす、馬の腹にまわるのもある。

生国魂神社のはみがきうりとは小間物屋で取り扱われ、はみがきうりだけで小間物売の商品として京阪ではないと喜多川守貞は云うが、境内では単品として売られていた。女祭文については珍しく通常は男祭文。三味線入りで流行の歌謡を祭文の調子を取り込んでいる。東清七は役者似顔生うつし、舞台上で紅粉白粉を塗り、立役・敵役・女かたそれぞれの髪を掛け、衣装を着て、声色をにせている。

栗餅の曲春はむこう鉢巻に手杵を持ち、斜めに構えた男が「サアへ、ひょうばんで——。元祖名代あはもちのきよくづきは生玉やが家の看板、ソレつくぞ、ヤレつくぞ、アリヤ、コリヤ、つくへへへ、何をつく、栗つく麦つく米をつく。旦那はんがたには供がつく。わかい後家御にやすしがつく。隠居さんは、ちょちんで餅をつく。おやまはお客のえりにつく。げい子にや又してもあしがつく。コリヤ居去の金たまへ砂がつく。ヨイへ、サッサ——、ひやうばん——²⁹⁾」

大阪道頓堀の芝居小屋は、当初小屋の特色があったが徐々に歌舞伎が中心になっていった。神社の境内には軽業あり、手品あり、物まねあり、歌舞伎あり、見世物などの場所が所せましとあり、参詣者は観劇を楽しみ、神社に付随している茶屋で休んだり酒を飲んで

28) 注3)に同じ。

29) 注3)に同じ。

いた。また、弥次郎兵衛・喜多八にしても遊びすぎて、魂が浮遊してしまった。

〈飲食〉として大阪は網島（淀川）に漁家が並び網を干していた。漁夫が多く住み、淀川の魚を取り市に売り、鮎字楼は変わった料理を出し富家の別宅・料亭が多かった。難波新地の豆茶や（茶屋）については前に述べたのでここでは書かない。新町の砂場も同じく蕎麦・うどんの和泉屋と名声がある。

道頓堀いろは茶屋、往古は炎天下、にわか雨の際の熱暑・雨露をさえぎる屋根もなく、難渋していた。浜側に茶店を出す事になった四十八軒のいろは茶屋は芝居人の休息所となった。

道修町のさとう漬については砂糖は道修町で販売されていた関係上菓屋で売られている。生国魂神社の境内に田楽茶屋があるのは安永6年「浪花名物富貴地座位³⁰⁾」にも記されている。高津神社の石段の下、西側に豆腐田楽の茶屋「田楽は生玉を専とし湯豆腐は高津の上なく」、浪花の名物にもなっていた大正鰻は「富貴地座位³¹⁾」に——和らかに忘れがたき風情あり此句ひにこたへかねる鼻いつとなく——「川魚料理屋」、文化6年に東海道中膝栗毛が刊行された当時は存在したが幕末には存在しない、道頓堀の二ツ井戸にあったと云う。

田楽茶屋に行くのも村人から伝え聞いた話か案内人の話を舌で味わう名物の蕎麦ならずとも田舎と違って経済・商業の中心地だけあって人も多く、飲食店も比較にならない程多い。商品原料の集産地であり、田舎では売りに来ない農産物も集まって来る。地方から来坂する人には普段喉に通ることのない産物を食することは「山海の珍味」と錯誤するぐらいである。

弥次郎兵衛・喜多八は食べること、飲むことも夢中になり、食の大阪を堪能した。

〈風景〉の好みは大阪人、旅人共に変わることはなく、興味は四天王寺、生国魂、高津神社、天満宮、和光寺、住吉神社、座摩の宮、博労の稻荷に必ず茶屋、見世物小屋等が付随している。神社仏閣と飲食、そして観劇と一ヶ所行けば半日は時間を楽しむことができる。

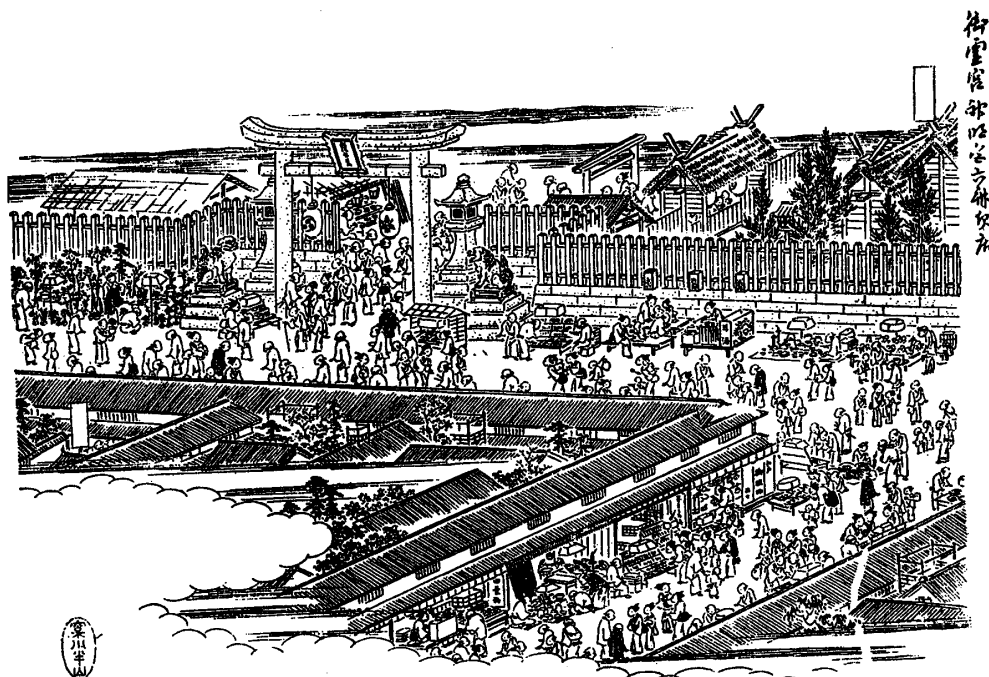
春夏秋冬は大阪に在住する人は見物できる。それは四ツ橋の夕涼みと同じ事である。春は桜の宮、夏は難波新地の納涼に螢をかり、秋はうかむ瀬の月、冬は解船町の雪げしき、新町と道頓堀を顔としている。弥次郎兵衛・喜多八は大阪の有名な場所を事実として知り、訪問した。作者は雑多な大阪を紹介し、境内には見世物、手品、歌舞伎、祭文を観て、茶店で酒食を楽しむ。

順慶町の夜店（内店・出店）は呉服屋・道具屋・袋物・櫛・馬瑙・珊瑚・玳瑁・小桶・飯櫃・すりこ木・杓子・小皿を売る店が連なっていれば、大阪在住でなくても、土産物の一つとして買い求める。〈風景〉が旅人に与える印象は「楽しさ、驚き、絶景、景色の占有、土産話として」持ち帰る。持ち帰った印象が〈風景〉だけでなく、〈観劇〉〈飲食〉も

30) 「浪花名物富貴地座位」（船越政一郎編『攝津名所圖會大成』第四）、浪速叢書刊行會、昭和2年11月。

31) 注30) に同じ。

図14 攝津名所圖會大成 卷之十三上 御霊神社



総て村人や家族へと伝播されていく。閉塞された社会に弥次郎兵衛・喜多八の旅が世人から注目される。そのような意味では「浪華名所獨案内」も大阪人及び近辺の人達と同じではないか、大阪人は「浪華名所獨案内」に表現されていない場所もよく知っていて、穴場を求めて休日一杯になる。(図14)

編笠茶屋は編笠を冠る近在の百姓が多く遊ぶ岡場所。

新堀は安治川の旧名。その南岸には脂粉女多く船員舂子を相手にする。他と違って歌舞と娼婦を兼ねる。

どくろは岡場所羅生門の異称、娼婦の品格劣等風習陰悪、不意に行人を掠し遊興を強う状をどくろ習性に較ぶ。

砂場は土地に名物蕎麦屋がある。難波名物の一。

築地は蟹島新地(天明3)の別称。山の鼻と呼び大川より東横堀分水の頭、(後略³²⁾)

これらは大阪の人が遊ぶ場所であるが、弥次郎兵衛・喜多八も密かに訪れたかもしれない。

近世の〈旅〉は中世とは全く違っていった。中世の旅は苦痛を伴う一つの試練でもあったが、近世の旅は道路の拡充・整備がなされ宿場が整い、発達した。食料を十分に確保しなくても金があればうれう事はなく、空腹を満たすことができた。旅の道中、雲助や護摩の灰、山賊・盗賊から襲われる危険は少なくなった。また、狼などの襲来も警戒しながら、関所の問題を踏まえて行動することになる。

32) 佐古慶三『大阪町名考』、関西新託、大正15年8月。

寺社参詣ひとつとっても、目的が中世と近世では大きな〈ずれ〉があり、和歌森太郎は『日本風俗史考³³⁾』で——江戸時代は、いわゆる物見遊山に出かけるのがいちだんと多くなった時代である。(中略) 社寺のうちにも、名所のうちに指折り数えられるものがあったが、そういうところでの祭礼や法会は、名物として指摘されるわけでもあった。——近世では物見遊山・観光化がなされ、旅の道中でも飯盛女を相手に性的発散をなし、名物料理に舌鼓をうち、神社・仏閣・道中のはずれで手品・軽業・物まねや浄瑠璃・歌舞伎などの観劇が旅の楽しさを倍加しただろう、噂になっている奇岩・変形した松が景観として土産話のひとつに記憶することになるだろう。また、京、大阪には道中とは比較にならない規模で観光をたのしませる。

京・大阪で得た〈性〉に係わる貴重な情報と遭遇したとき、〈新町〉に出かけて天神を抱けずに終り、現実との落差を感じる。

〈性的〉な振る舞いの代替行為を示す話として、「浪花洛陽振³⁴⁾」が書き残されている。難波の珍笑として、——正月十日、此日女のたしなみ所を吹竹二而ふかせ候と申候。表向二而、六文つゝ二而せ候こやかかけの前に、——これだけでも、十分空しさは伝わってくる。

だとすれば、名物蕎麦や町の風物を味わい、旅の景観あるいは観劇を死出の旅路として、人生の締めくくりに等しい出来事が存在しても不思議ではない。一方、現実には接することもない、多くの出来事が幻影しか獲得できない〈現実〉はいかばかりか。

旅に出、あれほど渴望・憧憬した〈新町〉は格下の女郎相手に気持ちの一部を果たすか、見るだけで大阪の人が遊びに行く場所で用を済ませる。希望の〈性〉は遠のくばかりで、新町で遊ぶ弥次郎兵衛・喜多八の〈性〉は、庶民から見れば心が揺れる分岐点であって、〈大阪〉は願望と絶望が交錯した泡の存在で、旅から帰っても幻影としてしか残存しなかった。

※紙幅の関係もあり、景観図を14枚所収したが、必ずしも文章と対応していない。

付記。池田治司氏より有益なご意見を随所にいただいたことを付しておきます。

33) 和歌森太郎『日本風俗史考』、潮出版社、1971年3月。

34) 大橋正叔校注「浪花洛陽振」(井口洋・松原秀江他校訂・編『上方巷談集』)、上方藝文叢刊行会、昭和57年4月。